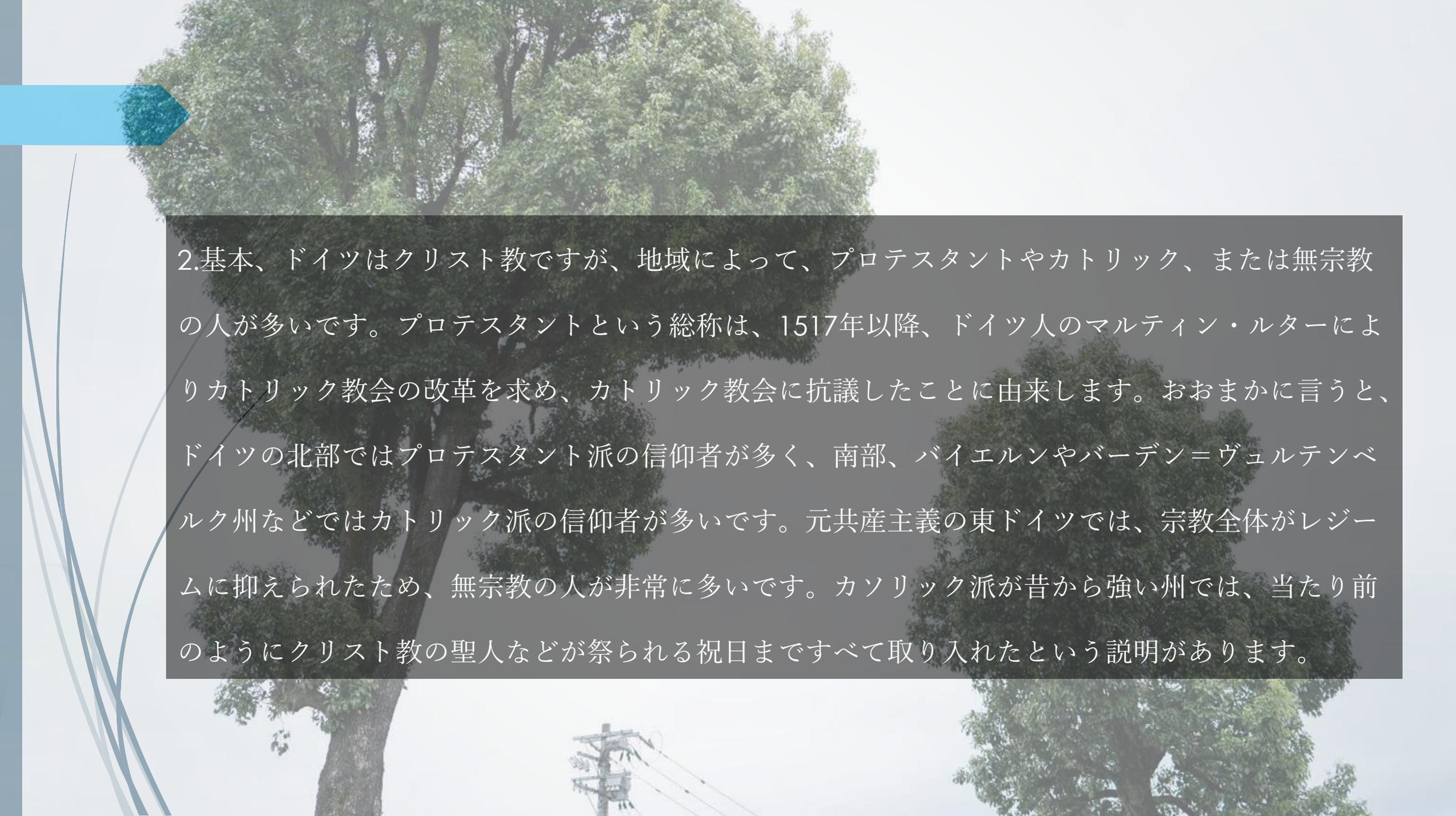




10月「Deutsche Feiertage」 アントニア・シュルト

1. 最近はドイツの文化などについての記事が少し少なかったような気がして、「よし、ドイツのお祭りについて何か書こう」と思いながらインターネットで調べ始めました。

時期的に次に来るのは、11月1日の「Allerheiligen」（諸聖人の日）ですが、私が故郷とするシュレースヴィヒ=ホルシュタイン州ではこの日がお祝いされていないので、過ごし方に関しては詳しくないです。お祝いされていないと言っても、実は「祝日ではない」と言えば正しいのかもしれませんが、中央集権的な日本では考えられないかもしれませんが、ドイツの連邦主義の一つの影響として、文化や教育といった政策部門については国が決めず、それぞれの州が決めます。その結果、祝日は州によって違いがあります。年間13日で祝日が一番多いのは南ドイツのバイエルン自由州で、シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州は9日で少ないです。「ずるっ！」と思う人もいるかもしれませんが、ドイツの場合は国祭日以外、すべての祝日が本来キリスト教にルーツを持ち、宗教的な背景があります。



2.基本、ドイツはキリスト教ですが、地域によって、プロテスタントやカトリック、または無宗教の人が多いです。プロテスタントという総称は、1517年以降、ドイツ人のマルティン・ルターによりカトリック教会の改革を求め、カトリック教会に抗議したことに由来します。おおまかに言うと、ドイツの北部ではプロテスタント派の信仰者が多く、南部、バイエルンやバーデン＝ヴュルテンベルク州などではカトリック派の信仰者が多いです。元共産主義の東ドイツでは、宗教全体がレジームに抑えられたため、無宗教の人が非常に多いです。カトリック派が昔から強い州では、当たり前のようにキリスト教の聖人などが祭られる祝日まですべて取り入れたという説明があります。

3. 面白いことに、ドイツが統一された後、殆ど無宗教である旧東ドイツでも宗教に基づく祝日をさ
らっと取り入れました。少し考えてみれば、そんなにおかしくないかもしれません。1950年代、大
多数のドイツ人がいずれの宗教に所属すると言っていたのに、現在は40%に落ち、尻下がりの傾向
にあります。そういった宗教的に背景があっても、若い世代の中ではその意識や知識がどんどん薄
めてきています。10年－20年が経てば、クリスマスやイースターなどは協会に行かなくなってもお
かしくないと思います。それはいいことか悪いことが簡単に言えることではないと思いますが、宗
教を文化の一部とすれば、文化が少し乏しくなるのではないかと思います。宗教、特に基督教
の歴史を見れば、複雑な部分もあり、そろそろなくしてもいいんじゃないかと思う人も確かにいま
すが、現代社会には虚しさが感じられます。宗教で埋めるとは言わないですが、消費文化だけでは
埋められないのも事実だと思います。